

鈴木有郷牧師 説教

6月14日「イエスの食卓はすべての人に開かれていた」

ルカ14:15-24

主イエスはその宣教において、一貫して食事を大切にされました。主イエスにとって食事を共にすることは、神の愛を象徴するのに最も相応しい行為でした。

今朝読んで頂いた「ディナー・パーティーのたとえ」は、この主イエスの考えを最も的確に表現しています。

ある富豪がディナー・パーティーを催します。ところが、招いた人達はいろいろな口実を作ってパーティーへの出席を断ります。そこでその富豪は、召使いを大通りに送り、座っている人、商いをしている人、通りがかりの人に声をかけ、すべてを食卓に招くように命じます。

そのディナー・パーティーの場面を想像してみましょう。通りにいる人々を誰彼構わず連れて来るわけですから、男性が女性の隣りに座り、異なる階級や様々な民族が食卓を共有し、汚れた人が汚れのない人と隣同士に座ることになります。

パリサイ派の人が収税人と、学者が罪の女と、貴族の若者が皮膚病の女と隣り合わせに座って食を分かち合っているのです。

これは当時のユダヤ人にとって、それこそ想像もできない光景だった筈です。当時のユダヤ人社会の差別の構造をそれは根底からひっくり返す大事件となった筈です。

しかし、主イエスは、この到底人間社会が許容する筈のない玉石混合のディナー・パーティーこそ、神が人間に望んでいる共同体の姿だと主張されたのです。

彼等は共に同じ食卓を囲み、パンやパターを回し、ワインをつぎ合い、愉快地談笑しているのです。主イエスを頭にした、完全に開かれた、平等な社会がそこにあります。

最後の晩餐において、主イエスは杯を取り、それを祝し、弟子達に渡して言われました。「これはあなたがたのために流された私の血潮です。これを飲むたびに、私を思い出し、私を記念しなさい。」

同じようにして、主イエスはパンを取り、それを祝し、弟子達に渡して言われました。「これはあなたがたのために割かれた私の身体です。これを食するたびに私を思い出し、私を記念しなさい。」

つまり、私達が招かれているのは、あくまでも和解と平等と共有の世界であって、この世の闘争と混乱と不平等の世界ではないのです。十字架の前夜、主イエスはそのことを弟子達に伝えようとされたのです。

今日の私達の聖餐式においても主イエスは同じ言葉を語り、ご自身のテーブルに私達を招き給うのです。あなたの隣りに跪いている人は主イエスにおけるあなたの兄弟であり、姉妹です。それにあずかる私達は、この世の地位や評判や名誉と全く無関係に、神に限りなく愛されている一個の、最も重く、貴重で、宇宙で唯一の人格的存在です。

この確信こそ私達を支える根源的力です。主イエスの食卓からほとばしり出る愛があるからこそ、私達はこの問題と困難に満ちた世界を、本当に人間らしく、正々堂々と生きることができるのです。

今日の聖餐式で、そのことを深く心に刻み付けようではありませんか。その時、私達の心は今を生きる喜びに満たされるに違いありません。